

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：33921

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12796

研究課題名(和文)現代女性の未婚・晩婚化とジェンダーのゆらぎに関する研究

研究課題名(英文)Femininity and the role of gender in unmarried women.

## 研究代表者

川合 南海子(久保南海子)(Kawai, Namiko)

愛知淑徳大学・心理学部・准教授

研究者番号：20379019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：男性同士の恋愛を描いたマンガや小説を愛好する女性たちがいる。恋愛における女性の存在を回避する彼女らは、自分の女性性や性役割について違和感を抱いているのではないか。腐女子を通じて、現代の女性たちが感じている葛藤や抑圧を可視化することが本研究の目的である。20歳前後の女子大学生を対象に、好んで読む小説・マンガのジャンルによって3群に分け、ジェンダー・パーソナリティや性役割観について質問紙調査を行った。その結果、腐女子は伝統的な性役割を肯定する傾向が、腐女子でない女性よりも顕著に低かった。腐女子は、自身の女性性を受容している一方で、女性への通念的な性役割に対しては否定的であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we divided 20-year-old female university students into three groups, according to their preference of genre for novels and manga. We conducted a questionnaire survey of six psychological scales. Results found that Fujoshi's specificity can be identified in their views of gender roles, love, and privacy orientation. Fujoshi have a significantly lower tendency to agree with the traditional mother's role than the non-Fujoshi. Fujoshi and the women who prefer non-love stories perceive the value of their love as lower than those who prefer love stories. On the other hand, Fujoshi and the women who prefer non-love stories place more emphasis on their own time and interests than the women who prefer love stories. These findings suggest that while Fujoshi accept their own femininity, they have negative attitudes toward the gender roles that society assigns to women.

研究分野：ジェンダー心理学

キーワード：ジェンダー・アイデンティティ 性役割 恋愛観 BL 腐女子

## 1. 研究開始当初の背景

日本における現代文化、マンガ・ゲーム・アニメや J-POP・アイドルなどは、国民の消費行動が縮小傾向の時代にありながら、いまや巨大な市場を形成している。また国内のみならず、海外からも「クール・ジャパン」として高い注目を集めている。そのようなサブカルチャーにおいて、男性同士の恋愛を描く「ボーイズラブ(通称 BL; ビーエル)」といわれるカテゴリが存在する。現在の BL 市場は約 220 億円といわれ、その規模は年々拡大している(矢野経済研究所, 2016)。BL は小説・映画・マンガはもとより、ゲームやミュージカル、ドラマ CD などのジャンルへ進出しており、大手出版社を含む多数の企業がそれぞれ専門の雑誌やレーベルを持っている。商業ベースだけでなく、約 60 万人が参加する世界最大規模の同人誌即売会である「コミックマーケット(コミケ)」で参加サークルの 6 割以上を占める女性系サークルにおいて、実に BL 作品は 7-8 割にもものぼる(東, 2015)。近年、そのような BL 作品を愛好する女性たちは「腐女子(ふじょし)」とよばれ、おもに 10 代から 30 代の若い女性たちが BL という巨大市場を支えている(コミックマーケット準備委員会, 2015)。

BL 作品を愛好する腐女子は作り手/読み手を問わず、その名称が示すようにほぼ 100% が女性である(溝口, 2015)。つまり、BL を嗜好する過程には女性特有の要因が存在すると考えられる。なぜ彼女たちは男性同士の関係に恋愛という過剰な意味を創り出すのか。そして、なぜそれを好む女性が少なからず存在するのか。特に興味深いのは、10 代から 30 代という自身も恋愛が身近である年齢の女性が、あえて女性が対象ではない恋愛作品を選ぶことである。

堀(2012)は、BL 作品として女性キャラクターが登場しなければ、読み手は「女」に付せられた取り決めや社会的な視線を意識しなくて済む、としている。だとすれば、BL 作品を読む女性は、女性としての自分が当事者になり得ない完全にデタッチメントされた世界に、傍観者/観察者としてコミットメントしていくことができる。藤本(2007)は、BL 作品内に登場する男性同士のカップルについて、彼らがいかに男女役割を模倣しているように見えても、それは組み合わせによって生まれてくる差異 = 個性にすぎず性差の抑圧からは自由であること、これによって読者は抑圧を排除した形で「男らしさ」「女らしさ」を楽しむことが可能になったことを指摘した。つまり、男性同士という組み合わせは、単純な性別による恋愛関係内の固定観念的な性役割を超えて、個の人間同士として恋愛を含めた密接かつ多様な関係性を構築できるデバイスだと考えられる。

商業ベースの BL 作品は、小説とマンガだけでも 1 ヶ月に 100 点以上が出版される多品種小ロットのジャンルである(溝口, 2015)。

インターネットのサイト内で発表される作品や同人誌まで入れると、流通している BL 作品のバリエーションは極めて膨大なものになる。腐女子は、そのなかから自分にとって心地よい関係性が描かれている作品を選び出す。腐女子たち当事者にとっても、自分がなぜ BL を愛好するのかについて理解することは難しいとされているが(金田, 2007)、BL を読むことが癒しや娯楽となっているならば、彼女たちが明確に自覚していないとしても、それは現実世界での葛藤の低減やジェンダーの抑圧からの解放と密接に関連しているのではないだろうか。

## 2. 研究の目的

現代の日本において、女性には出産を奨励する一方で労働の継続も求められている。そのような社会的な圧力がある反面、幼少時からゆとり教育の名の下で個性や趣味を重視する生き方を目指してきた世代でもある。現在の日本の女性は 25-29 歳で 60%、30-34 歳でも 34% の女性が未婚であり、この 20 年で 20% も未婚率が上昇している(平成 26 年度版少子化社会対策白書, 2014)。未婚女性が感じている結婚に対する不安要因には、50-60% の女性が「自分の生活リズムやスタイルを保てるか」「余暇や遊びの時間を自由に取れるか」をあげている(第 14 回出生動向基本調査, 2011)。彼女たちにとって、結婚や出産は自分らしい生活や趣味の楽しみとは対立する事項であると考えられる。

また、現代の女性は、学校では男女平等であると教育され、就職でも雇用機会均等は当然であるという時代を生きている。しかし実際は、女性の社会進出にはガラスの天井があるといわれ、日本における女性活用の低さは国際的にも問題視されている。そして、キャリアの継続と出産・育児の両立も容易とはいいがたく、出産を機に仕事を退職する女性はいまだ 54% にもものぼる(平成 26 年度版少子化社会対策白書, 2014)。また一方で、外見や行動に男らしさ女らしさを重視する風潮は特に若い世代で強い。結婚や子育てについても、若い女性たち自身のなかにすら伝統的な性役割による固定観念がいまだ根強く残っている(第 14 回出生動向基本調査, 2011)。

結婚への社会的圧力とそれに至る恋愛を重要視する風潮の一方で、自分らしい生き方を奨励され、また、働くことと結婚・出産・育児をすることの両立など、現代の女性にとって眼前の現実には迷いと葛藤に満ちている。そのような中で、特に就労や結婚・出産が身近となる 20 代以降の女性にとって、自身のアイデンティティと実生活における女性性(ジェンダー)の求められ方のバランスをとることが難しくなっていると考えられる。

男性同士の恋愛を素材にすることで性別にとらわれない多様な人間関係を描く BL 作品を好んで読む女性、すなわち腐女子は、ジェンダーについて特に感受性が高い女性と

仮定し、自身のアイデンティティと実生活における女性性の求められ方のバランスについて現代の女性たちが抱える潜在的なジレンマが鮮鋭化されているのではないかと、というのが本研究の仮説である。

いまや BL や腐女子は、現代のサブカルチャーの一翼を担う一大ポピュレーションであるにもかかわらず、そのありようはほとんど研究されてこなかった。思想的な論考は数多くなされてきたものの(e.g. 「ユリイカ」, 39(16), 2007; 44(15), 2012; 「美術手帖」, 66, 2014)、学術的な研究はエスノグラフィ調査をおこなった岡部(2008)や東(2015)、またテキストの分析を中心とした石田(2008)、堀(2009)や溝口(2015)などが最近になってようやくいくつか出てきたがまだ少なく、質問紙調査などを用いた定量的な研究はほとんどない(山岡, 2016)。

自身が恋愛をする立場にしながら、女性が関係しない男性同士の恋愛作品を愛好する腐女子女性が少なからず存在するということは、腐女子は特異的な存在ではなく、それ以外の女性との違いにおいて本質的な差異はないことを示唆する。女性は腐女子として生まれるのではなく、どこかの時点で腐女子になるという事実を鑑みれば、その分岐点と背景にある個人の社会に対する認識やジェンダーに関する考え方について、発達のな変化を理解することは非常に重要である。

本研究は、腐女子を研究することによって、腐女子だけでなく現代の女性たちが日常的なかで社会に対して漠然と感じているであろう、求められる女性像と自己のアイデンティティのズレによる違和感、すなわち明確には自覚していない現実社会での葛藤やジェンダーの抑圧を可視化して、現代女性の内面に迫ろうという試みである。そこで本研究では、ジェンダー・パーソナリティと恋愛観および伝統的な性役割観への意識について測定する 3 種類の心理尺度を用意した。また、小説やマンガ作品への自己投影や想像性の程度を測定するために、共感性と他者意識に関する 2 種類の心理尺度を用意した。さらに、趣味や自分の時間に対する意識について、プライバシー志向性を測定する心理尺度を用意した。以上の 6 種類の心理尺度から構成された質問紙を用いて、20 歳前後の女子大学生を対象に調査をおこなった。

### 3. 研究の方法

#### (1) 調査対象および手続き

A 県の私立大学人文社会系学部在籍する 19 歳から 21 歳の女子学生 124 名を対象とした。大学内の講義室にて一斉に実施した。

上記の調査にて BL を愛好する女子大学生の対象者から、同じく BL を愛好する 18 歳から 24 歳の女子大学生および女子大学院生を調査対象者として紹介してもらいスノーボールサンプリング法により、10 名に実施した。個別に質問紙調査票を配付して、後日回

収した。

#### (2) 調査内容

以下の 6 種類の心理尺度をもちいて調査した。

ジェンダー・パーソナリティの肯定的側面と否定的側面の双方を測定する「共同性・作動性尺度」(土肥・廣川, 2004)24 項目 4 件法。「肯定的共同性」「否定的共同性」「肯定的作動性」「否定的作動性」の 4 つの下位項目からなる。

特定の相手に限らず恋愛という現象自体への態度を測定する「恋愛イメージ尺度」(金政, 2002)28 項目 7 件法。「大切・必要」「刹那的・付加価値」「相互関係」「独占・束縛」「衝動・盲目的」「献身的」「成長」の 7 つの下位項目からなる。

社会文化的通念としての伝統的な性役割観に基づいた母親役割を信じる程度を測定する「母性愛信奉傾向尺度」(江上, 2005, 2007)13 項目 5 件法。

他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向をそれぞれ他者指向性 / 自己指向性という視点から測定する「多次元共感性尺度」(鈴木・木野, 2008)24 項目 5 件法。「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」「自己指向的反応」の 5 つの下位項目からなる。

他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定する「他者意識尺度」(辻, 1993)15 項目 5 件法。「内的他者意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」の 3 つの下位項目からなる。

個人がプライバシーを体験する状況をどの程度志向するかについて測定する「プライバシー志向性尺度」(吉田・溝上, 1996)21 項目 7 件法。

また、6 つの尺度とは別に、「普段よく見たり読んだりするもの」としてマンガと小説(いずれもインターネット上の作品および同人誌含む)のジャンルについて、各 15 項目から複数可で選択式の回答を求めた。さらに、上記のうち「最も好きなものから順に 3 つ」を記入式で回答するよう求めた。

### 4. 研究成果

#### (1) 対象者の分類

一斉配布での調査対象者 124 名のうち、「普段よく見たり読んだりする」マンガと小説(いずれもインターネット上の作品および同人誌含む)のジャンルでそれぞれ 15 項目(複数選択可)から、BL を選択した女子学生 20 名全員と、スノーボールサンプリング法によって収集した 10 名(いずれも上記のマンガ・小説のジャンル各 15 項目(複数選択可)から、BL を選択していた)を「腐女子群」、好んで読むマンガと小説(いずれもインターネット上の作品および同人誌含む)のジャンルを上位から 3 つ問う項目で、上位 2 つまでに恋愛ものと回答した女子学生 34 名を「恋愛群」、3 つとも BL もしくは恋愛もの以外の

ジャンルを回答した女子学生 39 名を「非恋愛群」として、計 103 名を分析対象とした。

(2) 3群(腐女子/恋愛/非恋愛)で有意差のあった結果

恋愛という現象自体への態度を測定する「恋愛イメージ尺度」において、3群×7下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、群の主効果が有意( $F(2, 100) = 4.91, p = 0.01$ )、下位項目の主効果が有意( $F(6, 600) = 56.25, p < 0.001$ )、群と下位項目の交互作用が有意であった( $F(12, 600) = 4.76, p < 0.001$ )。下位検定の結果、「大切・必要」「刹那的・付加価値」「献身」「成長」で3群の有意差があった( $p < 0.05$ )。恋愛群は、腐女子群と非恋愛群よりも「大切・必要」の得点が高かった。腐女子群と非恋愛群での有意差はなかった。腐女子群は、恋愛群よりも「刹那的・付加価値」の得点が高く、「献身」「成長」の得点が低かった。これらの下位項目について、腐女子群と非恋愛群、恋愛群と非恋愛群での有意差はなかった。

社会通念としての伝統的な母親役割を信じる程度を測定する「母性愛信奉傾向尺度」において、3群の得点について1要因分散分析をおこなったところ、群の主効果が有意( $F(2, 100) = 10.03, p < 0.001$ )であった。下位検定の結果、3群それぞれの間有意な差があり( $p < 0.05$ )、腐女子群の得点が高かったのも低く、次に低いのが非恋愛群、一番高かったのは恋愛群であった。

個人がプライバシーを志向する程度について測定する「プライバシー志向性尺度」において、3群の得点について1要因分散分析をおこなったところ、群の主効果が有意( $F(2, 100) = 6.44, p < 0.01$ )であった。下位検定の結果、恋愛群は腐女子群と非恋愛群よりも有意に得点が高かったが( $p < 0.05$ )、腐女子群と非恋愛群での有意差はなかった。

(3) 3群(腐女子/恋愛/非恋愛)で有意差のなかった結果

ジェンダー・パーソナリティの肯定的側面と否定的側面の双方を測定する「共同性・作動性尺度」の得点において、3群×4下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、下位項目の主効果が有意( $F(3, 300) = 62.63, p < 0.001$ )であったが、群の主効果および群と下位項目の交互作用は有意でなかった。したがって、「肯定的共同性」「否定的共同性」「肯定的作動性」「否定的作動性」のいずれの下位項目でも3群間での有意差はなかった。

他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向を測定する「多次元共感性尺度」の得点において、3群×5下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、下位項目の主効果が有意( $F(4, 400) = 12.10, p < 0.001$ )であったが、群の主効果および群と下位項目の交互作用は有意でなかった。したがって、

「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」「自己指向的反応」のいずれの下位項目でも3群間での有意な差はなかった。

他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定する「他者意識尺度」の得点において、3群×3下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、下位項目の主効果が有意( $F(2, 200) = 3.54, p < 0.05$ )であったが、群の主効果および群と下位項目の交互作用は有意でなかった。したがって、「内的他者意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」のいずれの下位項目でも3群間での有意差はなかった。

(4) 考察

腐女子のジェンダー・アイデンティティ：本研究では、ジェンダー・アイデンティティの測定でおこなわれるような(佐々木・尾崎, 2007)、自身のジェンダーへの展望や社会現実性、また受容性や一貫性などについて調査したのではなく、性格特性としての女性性(共同性)と男性性(作動性)を測定した。それは、自覚に基づいたジェンダーへの意識よりも、日常生活での行動や思考の傾向にみられるような無意識的なジェンダー・パーソナリティを顕在化するためである。使用した尺度には、女性性と男性性の肯定的側面と否定的側面を分けて測定する特徴がある。そのため、個人におけるジェンダー・パーソナリティを複数要因のバランスという視点で検討できた。

結果として、腐女子の性格的な女性性・男性性は、そうでない女性たちとの違いはなく、肯定的・否定的のバランスにも差はなかった。腐女子に女性性の低さや女性性の否定といった傾向は見られないことが明らかになった。つまり、腐女子のジェンダー・パーソナリティに、腐女子ならではの特徴はないといえる。彼女らの行動や思考は、腐女子でない女性と同様に女性性が優位であり、その肯定/否定的のバランスは拮抗している。

これらの結果は、初期のBL/腐女子研究(中島, 1991; 荷宮, 1995; 上野, 1998)でみられた(そして一般的な見解として、いまだに根強くある)未熟な女性性や女性嫌悪といった解釈とは一致しない。近年のBL/腐女子研究で「BLにおいて回避されているのは、性や女らしさではない」との指摘もあるが、この結果はそれをデータによって実証していると考えられる。

BL作品への共感性：他者に対する意識としても、腐女子の特徴は見いだせなかった。現実での他者に対する認知や注意の向け方(内的/外的他者意識)にも、一方で、空想の何者かに対する意識(空想的他者意識)にも差はなく、いわゆる「腐女子の妄想癖」は、そうでない女性と比べても違いがない程度であることが明らかとなった。腐女子の妄想癖はそれ自体の頻度や程度で認識されるのではなく、妄想する彼女らの自覚の高さによ

るのではないだろうか。

そして、同じく違いのなかった「共感性」であるが、なかでも興味深いのは「架空の人物の感情や行動に自身を投影して想像する傾向」を測定する下位項目（想像性）でも差がなかったことである。自身の性別とは異なる人物たちの恋愛作品であっても、そこに自身を投影する程度は、恋愛ものが好きな女性たちが自身と同じ性別の人物が登場する恋愛作品へ、自身を投影するよりも低いというわけではない。腐女子は、恋愛ものを読む女性たちのように、BL 作品に自分を見ていることが示唆された。性別による制約をなくして共感するのであれば、恋愛における視点や立場の選択は、男女間の恋愛作品に対してよりも多様で自由になるだろう。

堀(2012)は、腐女子にとって BL は物語のなかに自分に似た者を探して共感するのではなく、自分が不在であるからこそ没頭できるファンタジーであるとしている。本研究の結果は、恋愛ものが好きな女性は、女性による物語であるからこそ共感でき、BL が好きな女性は、女性によらない物語であるからこそ共感できるという程度に差はないことを明らかにした。つまり、腐女子にとって BL は、自分が不在でありながらも自分と無関係の物語ではなく、自分の「何か」と共感する物語であると考えられる。

社会通念的な性役割観への反発：いったい、その何かとはなんであろうか。今回の調査の結果、もっとも顕著にあらわれた腐女子に特有の傾向は、社会的な通念としてみられる伝統的な母親役割への否定的な姿勢であった。いわゆる「母性愛」について批判的思考を抱いていることが腐女子の特徴であるという点は、先に述べたジェンダー・パーソナリティには差異がないことと合わせてみると、非常に示唆に富んでいる。自身の行動や思考のパターンには典型的な女性性を示していながら、出産・育児に関する女性性、すなわちそれらの性役割に対しては性差による偏りを認めていない。単純に、女性だからというだけで、出産・育児にともなう責任を「母性愛」と名付けた通念で母親に求めることへの強い否定が示されている。この結果から、腐女子のジェンダーに関連する特性は、彼女たち自身の女性性にあるのではなく、対社会的な性役割観にあることが明らかとなった。

調査対象者となった女子学生たちは、学校教育では男女平等があたりまえの世代である。教科による性差はなく、家庭科を男子が履修するのも見ている。しかし、それは学校を離れて社会に出ると一変する。わけでも出産・育児には、生物学的な性差以上の大きなジェンダー格差がある。今回の調査の結果は、社会通念的な性役割の非対称性に対する感受性の程度を反映している。まだ出産や育児がまったく現実的ではない女子大学生たちに対して「母性愛」という指標を用いたこと

で、ふだんは自分でもあまり意識することのない潜在的な性役割への態度をみることでできたと考えられる。

腐女子には、母性愛という神話的な概念で覆われているジェンダー格差への感受性が高く、かつそれを是としないありようが見てとれる。そこには、自分が女性であることと、それ故に付加される性役割を盲目的に受容することは別である、という腐女子の心的傾向が示唆される。BL 作品にも女性的/男性的な性役割は数多く存在している。しかし、その人物が男性同士である以上、そこで描かれる性役割は通念的に付加されたものではなく、新たに構築された関係において自発的に選択されたものとなる。そのような「自己決定権ファンタジー」(溝口, 2015)が BL の重要な要素だとすれば、本研究の結果から示された腐女子の抱いているジェンダー格差への反発は、まさに BL によって癒され、さらに娯楽へと昇華されていると考えられる。

本研究の結果のなかで特に興味深いのは、単純に恋愛という事象への関心の程度では、性役割観の差異が顕在化しない点である。社会通念的な性役割観への親和と否定のグラデーションは、好む作品が恋愛ものかそれ以外かというジャンル分けにはよらず、いわゆる普通の男女間の恋愛ものか(親和)、恋愛作品にはそれほど関心がないか(中庸)、男性同士の恋愛ものか(否定)という様相であった。ある価値観への感受性という点では、社会的な通念に親和的であるよりも、あえて否定する方が感受性は強いと考えられる。本研究の結果では、恋愛をあつかう作品そのものへのデタッチメントは、腐女子よりも性役割観への感受性の弱いところで見られ(非恋愛群)、感度が上がって否定に傾いたところでは、ふたたび恋愛作品(ただし男性同士の)へ回帰していることが示された(腐女子群)。この点から、「母性愛」という通念的な性役割観への強い否定がある腐女子が、それでも恋愛作品を好むにいたる背景には、デタッチメントを超えてからの主体的なコミットメントがあることが推察される。男性同士を対象にすることで、恋愛という関係性の再選択ともいえるコミットメントを可能にしたのが、BL というデバイスの特異性なのだろう。男性同士であれば、生物学的に出産は不可能である。したがって、恋愛の先には結婚・出産・育児があると考えられる通年的な性役割観とは無縁である BL と、伝統的な性役割観の最右翼ともいえるべき母性愛への信奉は相反するものであるが、今回の調査の結果から BL を愛好する腐女子たちはそれを敏感に感知していることが明らかとなった。

「私にとっての」恋愛：男性同士の恋愛作品を好む腐女子は、どのような恋愛観を持っているのだろうか。恋愛ものを好む女性たちは、どちらかといえば恋愛を大切で必要だと思っているが、恋愛もの以外の作品を好む女性たちや腐女子の得点はそれらの項目に

において恋愛ものを好む女性たちよりも有意に低く、恋愛をそれほど大切に必要なものとは思っていなかった。これらのことから、腐女子の恋愛観は、「恋愛は私を幸せな気分させてくれる」「恋愛とは自分を磨く機会だと思う」など「私/自分にとっての恋愛の意義」について問われるようなときに、ややネガティブなものとして顕在化すると考えられる。しかし、恋愛もの以外の作品を好む女性たちとの間に有意な差がないことから、これは腐女子の恋愛観の特徴というよりは、恋愛ものを好む女性たちは自分の恋愛も重視している傾向の証左といえよう。

また、プライバシーを志向する程度について測定した結果から、腐女子と非恋愛ものを好む女性は、恋愛ものを好む女性よりも、一人の時間や個人の趣味を重視していた。そのような「自立的」ともいえる志向性は、恋愛に代表されるような他者との深い関係が、自身に直接および影響について回避的になるとも考えられる。

腐女子が、恋愛ものが好きな女性たちほど自分にとっての恋愛に意義を見いだしていないことは、先に述べたジェンダー格差への高い感受性と無関係であるとは考えにくい。出産・育児だけでなく、恋愛にも大きなジェンダー格差が存在する(堀, 2009)。今回の調査対象者である20歳前後の女子大学生たちにとって恋愛は、出産・育児よりもよほど身近にある問題である。腐女子の抱いている通念的な性役割観への懐疑や反発は、自身にとっての恋愛の意義について、どちらかといえばネガティブな構えを形成しているのかも知れない。

一方で、腐女子とそうでない女性で違いがないのは、恋愛とは相互関係であると思っ

ているであった。そして、「恋愛をすると相手を独占したくなると思う」「恋愛はお互いを理解し合うことだと思う」など「相手/互いが存在する恋愛という現象自体への個人的な態度」はいずれの女性でも同様の傾向が見られた。自分という存在から離れ、恋愛とは何かという考え方を問われる場合には、どのような作品を嗜好するかは影響しないと考えられる。

まとめ: 腐女子とよばれる女性たちがBL作品を愛好することは、恋愛という密接な人間関係を通念的な性役割から解放して、「女性として」ではなく「人間として」の物語として楽しむことであると、本研究の結果は示唆している。腐女子とジェンダーとの関連については、BL研究でもかなり関心が高く、これまでさまざまな論考等で言及されてきたが、今回の複数の尺度による測定データをもとにして実証的な検討が可能となった。今後は腐女子への参与観察やインタビュー調査などを含めて、より詳細な検討をおこないたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

- (1) 久保(川合)南海子(2017), 腐女子の「女子ジレンマ」, 2017年度日本認知科学会第34回大会発表抄録集(査読あり), 148-152.

[学会発表](計5件)

- (1) 久保(川合)南海子(2017), 腐女子の「女子ジレンマ」, 日本認知科学会第34回大会.
- (2) 久保(川合)南海子(2017), 表現と越境するジェンダー, 科学研究費補助金・一般公開シンポジウム(企画・主催).
- (3) 久保(川合)南海子(2017), 失われるもの、現れてくること 老齡ザルとヒト高齡者の実験から, 認定心理士の会「東海支部会シンポジウム」老年心理学の最前線: 心理学が超高齡社会でできること(招待講演).
- (4) 久保(川合)南海子(2017), 「腐女子」のジェンダー・パーソナリティと性役割観, 第28回日本発達心理学会.
- (5) 久保(川合)南海子(2016), 「腐女子」の感性-そのジェンダー・パーソナリティと恋愛観-, 第18回日本感性工学会.

[図書](計1件)

- (1) 久保南海子(2018), ベーシック発達心理学, 東京大学出版会, 313(287-303).

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

川合(久保)南海子 (Kubo-Kawai, Namiko)  
愛知淑徳大学・心理学部・准教授  
研究者番号: 20379019